



長沢鼎翁と愛孫幸助と伊地知夫人

ら伊地知君が現れた。

酒倉に入ると大樽、中

樽、小樽が並べられて居

る。樽の大なるものは一個

二万五千ガロン入りのがあ  
る。

モスケット、シェリー、

ポートなど試味があつて少

しく陶然となる。此倉庫に

は三十七万ガロンの酒が貯

えてある旨を語られた。

三十七万ガロンという

と、随分長い間飲める。私

が毎日一ガロンずつ飲むと

しても一千年間飲める勘定だ。こう勘定して見ると、此の倉の中で千年程

生きていたように思う。

○ ○ ○

うち連れて庭園を散歩しながら前面を見渡せば、サンタ・ローザの田

園、小丘、市街眼下に集まる。洵にいい景色だ。

幸助は走って犬と相撲をとる。車仕掛の噴水は太陽に映じて芝生を照ら

している。

幸助は此の山荘の独り児である。毎日動物を友として遊び、遊び疲るれば眠る。王翰の詩を想い浮かべる。

葡萄酒の美味夜光の杯。

飲んと欲して琵琶馬上に催す。

酔うて砂上に臥す君笑う勿れ。

古来征戦幾人か回る。

○ ○ ○

一月後再び山荘を訪う。幸助は既に舊友の親しみが加わる。鹿の子を抱いて来て私に見せた。

嗚呼、子供は田園に育てたいものだ。

#### ◎ 附近の古跡調べ

伊地知君の談によればサンタ・ローザ附近の墓に今から三十年前広島県

の某が眠っているという事だ。またクロバデルに於いて四十年前借地耕作

をした邦人があるということを聞いた。鼎君訪問の序にそれ等の古跡を尋

ねる気になり此山荘を辞してタウンに下り、防長屋という旅館を訪うた。

時に七月十九日。

(正誤) — 本稿第十六中「此の人は植物の改良家として今日世界の権威エ

ジソンと共に米国発明界権威となっている人で電気界の泰斗と称せられて

いる」とあるは「此の人は植物の改良家として今日世界の権威となつてい

る人で、電気界の権威エジソン氏と共に米国発明界の泰斗と称せられてい

る」の誤り。

る。私曰く

「あなたは、何というお名前？」

「伊地知幸助」

「歳はおいくつ」

「四つ」

「あなたのパパさんの名は」

「伊地知共喜」

幸助は私を更に養鶏場に導くのである。オークツリーの木陰に建てられた幾つかの小屋を、一々見まわり、卵の生んである箱からそれを取り出し、私に二個を持たせ、一つは自分がもって本屋の方に歩むのであった。彼れは社交術の大家の如く其態度が落ついている。

(二十)

◎小長沢の事Ⅱ下

本家のまわりには色々な果樹が植えられてある。桜、梨、桃、蜜柑、グレプ・フルーツなど四十年ほどの古木の姿を示して立ち並んでいる。桜の実はやや黄ばみかけており、グレプ・フルーツは地に落ちてゐる。

「綺麗なのが落ちていますね」

と一つ拾いあげる。

「あなた、それをたべますか」

「それはシクメンがたべる」

「あなたは？」

「酸っぱいから、砂糖かけてたべる」

相携えて本家に帰った。

伊地知夫人はアイスクリームとケーキとを饗応せられる。幸助は私と向合つてたべる。幸助の手はきたない。

「きたないお手々です」

と夫人はタオルを取りに出て行かれる。幸助はいう。

「此のケーキはま・ま・まが作った。むまいでしょう」

「ハイ」

「此のアイスクリームは田中さんが作った。これはアイスボックスの中に入れておかないと、とけてしまうよ」

やがてグレプジュースが出る。幸助は飲み且つ食い、そして大活動を演じはじめた。先ず繻珍のソフワアの上に靴のまま上る。それからマガニーの椅子をひっくりかえす。無数に並んでいる書物を足でばんばん蹴りまわる。暫くして私の傍に来た。

「おじさんホースを見せようか、ポネも居るよ」

夫人と幸助と私は酒倉に伊地知君を尋ねべく連れ立って行った。幸助は砂利道を蹴飛ばしながら鼻唄をうたう。

「ハハン、ハハン、ハハハン」

○ ○ ○

酒倉とグレプジュース倉とは道をはさんで並んでいる。倉庫の一方か

ばせ」と申される。

此の方が伊地知君の奥様だと、電光石火の早業で了解した。

すると、電光石火の如く一個の少年が現れて来た。彼れは田園生活に於て見るところのドングリパンツを着、口のまわりにチョコレット・キャンデーの画を彩っている。

私は伊地知夫人に誘われるままに古典的なパーラーに腰を掛けた。少年も其処に鎮座した。

夫人が私に茶をたてて下さる間に少年は私に話しかけた。

「おじさん、どこから来た？」

「サン・フランシスコから来ました」

「おじさん、今晚泊る？」

「泊るかも知れません。泊らぬかも知れません」

「おじさん驚鳥を見せましょうか」

「驚鳥とは？」

「グー、グー、グーという白い鳥だ」

此の幼年の日本語は実に流暢なもので、鼎老翁の日本語よりも数段上手である。

「おじさん、驚鳥を見ますか」

「ハイ」

「こちらですよ」

彼は直ぐに私の手を取って引ッぱる。

庭園には幾つかの凹形な泉水がある。花と、緑草と、果樹との間に曲径が通じている。其中間を少年は私の手を握りながら進み行く。やがて第二の泉水の傍に来た。

「さかながいるよ」

蛙の児が黒い色をして無数におどり、小魚の泳ぐのが見える。私は蛙の児をさして

「あれは何ですか？」

少年は暫く考えていた。

「あれはフロッグのベビーよ」

彼は斯く答えながら不安らしく私の顔を見る。

「全くですね、あれは蛙フロッグベビーの児です。その通りです」

少年の顔には成功の誇りが見えた。

「おじさん、あっちに行こう」

彼は驚鳥のある所へ私を誘うのであった。数十羽のターキーが頓狂な声をたてて周囲の同族に警告を発する。

「これは、ターキーの児」

「……………」

「あれが驚鳥だ。おじさん分かるか」

「はい、分ります」

前面のフェンスの中には驚鳥や鴨がガガ、ゲグと音たてて我等の襲撃を防衛せんとする。恰も排日派が無心の日本人を理由なく恐るる如くであ



鼎君は常に近親の者に語りて曰く

「私は自分のからだは神の殿堂であるというハリス先生の教えを信ずる。自身が神の宮であるからそれを清潔に保存せねばならぬ。故に衣服は破れても清潔なものを着、食物も材料の如何によらず奇麗にしてたべる。それは我々が清潔を保つ所以である。私は教会に行かない。教会は私を清むる所だと信じない。私は他人の説を聞くよりも、自分自身を節制することに努める」と。

### (十八)

#### ◎長澤氏の家庭

鼎君の現住はファンテン・グローブの山腹にある見晴らしのよい所である。金儲け一点張りの人の建てた家でないことは往って見ると直に分る。家は四十九年前に建てたのであるが、昔ながらの頑丈造りで総二階二十室の大廈である。

建築は英国式である。どことなく古典的な、天井の高い広々とした家で、ダイニングルームは五、六十人が一度に食事すべきほどのものである。トーマス・レーキ・ハリス君が此家を建てられた頃の加州は、新移民が見すばらしい家を建てて農業を始めた頃であったから、此山荘は近辺の注意を惹いたことであろう。鼎君に聞くと「ハリス先生は財産家ではなかった」といわれる。併し一八六三年頃にハリス先生は紐育附近のアスカ・アメニア銀行を支配していられたところから考えると、我々の如き徒手

空拳の日本移民の様なものでなかったことが分る。

ハリス先生は一八六五年に紐育州ブラクトンに千五百エーカーの土地を買い、一八七五年に加州に移住し、ファンテン・グローブに四百エーカーを買った。其移住の年に新家屋を建築し、農場の開墾をなし、牛馬の家畜も買入れたのであるから、小資本では埒が明かない筈である。

ハリス先生は宗教家で詩人で哲学者であった筈だが、斯の如き人間離れた人が如何にして金を持っていたか、我々には想像がつかない。

強いて想像すれば同伴して移住したミセス・リクワーという婦人が先夫の財産を所有し、それをハリス先生に提供したと考えられる。ミセス・リクワーは加州移住当時からハリス先生の内縁の妻であった。

右様の詮索は鼎君の事蹟に関して当面の必要でないかも知れぬ。併し仔細に鼎君の事蹟を記すには閑却すべからざる重要事であるから一言その事に触れて置く次第である。

○ ○ ○

鼎君は幼時純粋な日本武士の氣象を持参して英国に渡り、転じて米国に渡ったのであった。金勘定は武士の耻る処であったから、長い間金のことには知らずに済んだ人である。鼎君は私に話さるるには「私は英国でも米国でも金の勘定をしたことがなかった。金の計算を知ったのは四十歳以後だ」と笑っていられた。

尤も鼎君の金勘定の話はいくらか割引して聞く必要がある。何となれば

て彼れの全伝を書くつもりでない。唯我等日本人米国移住の率先者として記録せんと考えたに過ぎないのであつた。然るに私が其事蹟の梗概を記さんとして彼の山莊を訪うや、彼は二十五年来の旧知を以て遇し、其將に湮滅せんとする事蹟を回顧し食堂といわず、書齋といわず、淳々として語り涼々として談ず。私は是を聞くに随つて興味大に起り、随つて聞き、随つて録すること四日二夜に及ぶ。併し彼の事業と功蹟とは此の短日の間に記録し盡す能わざるを悟り、遺憾ながら尚一回で本稿を擱くこととする。

凡そ史伝に於いて現存の人物を記録せんとすることは至難の業たることを痛感した。何となれば、死後の人を録するは「死人に口なき」が故に当ツッポの事を書くも、文句を申出づる人が少なきに反し、現存の人物を記録するに於いては姓名、年月、場所、事実等一字一句と雖も当ツッポでは通用しないからである。

事實に無頓着で、其人物を当ツッポで品隲することは容易である。世の人物評論家は、其人を見ずとも、其事蹟の眞実を知らずとも、噂を聞いてでも書ける。風采を見ても書ける。是等の評論家は事蹟の眞を伝ふるよりも自己の直覚を表白すれば足りるのである。舞文羅織して其一点一角に直入すれば足るのである。而も私の記さんとする所は努めて自己の感興を殺して、事實の眞を描かんとするのであつた。愚人の事業たることは自ら甘んずる所である。

最後に鼎君の宗教を一瞥して見たい。鼎君は十五歳の時よりトーマス・ハリス氏の農園に人となり朝夕其風格に触れた。私は其人格に触れたと言わぬ。或は人格に触れたかも知れない。しかし、鼎君の語る所を玩味する時、私は彼れがハリス氏の全人格を了々地に悟入したと考えられない。ハリス君の処世は勤勉であつた。鼎君は之を学んだ。ハリス君の風格は單純であつた。鼎君は其素質に順応して之を学んだ。ハリス先生の宗教は鼎君しばしば之を聞いた。而して之を学んだ。併しハリス先生の悟道と鼎君の悟道とは同じでない。それは当然必至の心理であらねばならぬ。

ハリス先生は人間愛、人間美に徹底した。然れども鼎君は人間美を知つて人間愛に徹底するの機会を得て居らなかつたと思われる。それは薩摩の健児を作つた道徳が日本人たる鼎君の血脈に遺伝していたからではあるまいか。

薩摩の健児は人間愛に徹底していたに相違ない。彼等は恋をした。彼等は男と男と心中をする程恋の達人であつた。況んや天の定めたる男女の恋愛に於いてをやである。併し人は年齢と境遇とに依つて自然に其の趣を異にする。鼎君をして恋を味わうの機会を等閑に附せしめたのは其年齢と境遇とが然らしめたのである。

鼎君は自覚によりて男女間の恋を放擲したのであろう乎。或いは先天的に恋を味わうべからざる體質をもつたのであろう乎。或いは境遇と時代とが然らしめたのであろう乎。此研究は尚未来の研究として保留したい。

家として今日世界の権威エジソン氏と共に米國發明界權威となつてゐる人で、電氣界の泰斗と称せられている。鼎君はバーバンク氏と交際し、植物上の知識を交換し大に得る処があつた

### ◎養蚕の試験

一八九七年（明治三十年）第一回帰朝の時、彼れは農商務省に請ひ桑苗一万本の輸送を取寄せ、これを自園に移植し、養蚕を試みた。加州に於いて養蚕の試育は蓋しこれが最初であつたかも知れん。（此頃サンデゴの某白人が同所に於いて試育したことがあるが、泉哲君（米國法学博士）の実見談によると、鼎君の方が少し早いと思はるる）

（因に記す。一八七一年（明治四年）長野県人田中文蔵君、米國に於いて養蚕業を企てんとして蚕卵紙を持参し渡米したが、航海中卵紙を海水に依つて損傷し遂に其目的を達する能わず、彼は其後支那人街に近きジャクソン街に「達磨落し」「吹矢」等の遊戯場を設けたが何れも失敗し、後支那人教会のダウンセラの一室を借りて生活し、ミルク配達をなせしが其後の事跡は不明である）

鼎君の養蚕はかなりの成績を挙げ、日本産に劣らぬ生糸が出来た。一九〇二年（明治三十五年）上野領事に其生糸を持参して鼎君が領事官邸に見えた時私はそれを実験したことがある。

右の生糸は京都西陣に送り羽二重に織らしめた。立派な品物になって、現に其絹布は長澤家に保存せられてあるのを見た。

### ◎牧畜家として

鼎君は農場の基礎が確立するや家禽、家畜、牧畜の業に興味をもち諸種の改良を企てた。彼は特に馬正の改良に意を注ぎ、一八九五年（明治二十年）頃から優良の種馬を、アフリカ及びヨーロッパから移入した。現今飼育するものはギヤマン・コーチ（肥大の馬）アラビア（競馬）サラビア（ボギー及び競馬）等が居る。そして附近の農家に馬正改良を奨励してゐる。

曾て朝鮮模範場長本田幸助氏が渡米せられし時、鼎君は之に託して種馬及び種牛数種を輸送したことがある。

### ◎殖民者として

彼が一八九七年（明治三十年）に企てた、墨国シナロア州土地買収の件は資金調達の不調によつて中止された。併し考へて見る、墨国最初の殖民事業家たる榎本武揚君は其翌年一八八九年（明治三十一年）に始めて十万円の資本金で墨国チャーパス州エスキストラに殖民を始め、大失敗した時代であるから、鼎君が二百万円の資金調達の不調は実は当然の失敗であつた。同時に彼の慧眼が此の時代に輝いていたことを想像し、嗚呼日本民族の海外思想の後れたることを嘆ぜざるを得ない。

### （十七）

### ◎鼎君の宗教観

鼎君の事蹟は知らず識らずの間に長く書くようになった。私は本文に於

私は此機会に於て鼎君が女に関する諸流説を略記し、其誤りの甚だしいのを訂正して見たい。

### ◎鼎君ロマンスの誤伝

日本の映画劇に「長澤鼎成功談」というのがあるそうだ。此劇は鼎君のロマンスを点綴し可なり空想を逞うしたものであるそう。ロマンスの筋は鼎君が外国留学当時、藩中にて深く約束した令嬢があつて、其令嬢は鼎君を待ちこがれているけれども、鼎君は帰つて見えない。親達は令嬢を無理やりに他の顯官に縁付けた。鼎君は外国でその事を聞いて失恋し、以来独身生活を通しているというのである。

今一つは、今から二十年ほど前の流説である。それは鼎君が某白人と恋していたが、加州の法律では日白人の結婚が出来ない事を知つて、女の方で失恋の結果、身を投げて死んだというのである。

尚一つの話は、明治四年岩倉公が大使として米国に見えられた時五人の若姫を留学生として連れて来られた。此中に山川捨松という姫様があつたが、鼎君はワシントン府に於いて此の姫を見染めて恋々の情に堪えず、意中の人として長く記念していたが、此の山川嬢は薩藩出身の大山巖大将に縁付いた。それを聴いた鼎君は失恋の人となり生涯を独身で暮すという覚悟をしたというのである。

私が鼎君及び伊地知君に質し、且つ当時の事情を考究すれば以上の諸流説は一笑にも値せざる無根の流説である。第一、鼎君国元出発の時は僅か十三歳で、特に鹿兒島武士氣質の家に育てられた無邪気な少年である。第

二、岩倉公が米国渡航の際に同伴された山川捨松嬢は十一歳の少女である。而も鼎君は其噂を聞いたのみで姫さん達に会う機会などはなかつた。

鼎君恋に関する伝説は調べれば調べるほど艶消しになつてしまつた。私の希望から申すと、其一説位本物であつて欲しいのだが、皆ウソだから止むを得ない。

### (十六)

### ◎鼎君の産業

鼎君は曾て述べし通り、英国留学の初めには藩公から造船科を割当てられたものであるが十五歳の時米国に転居しハリス先生の下に人となつてから農業専門の生活を送つた。初めから造船が鼎君の志であつたか無かつたか、幼年のこと故、確きりとして居なかつたのである。而して総ての人は境遇に導かれて進化するものである以上は鼎君も長い間の田園生活が習性を作つて遂に殖産の人となられたのであろう。而して今彼れの事業を追懐して見ると大略下の如く現れている。

### ◎園芸家として

彼が二十三歳の時、サンタ・ローザに移つてから最も意を用いたのは云う迄もなく葡萄栽培と醸造業とであつた。彼は世界名園ミヤより新種の葡萄を取寄せて自園に植付けた。而して自らも諸種の改良法を考案した。

然るに茲に天祐といわんか僥倖といわんか、鼎君が移住の二年前頃からバーバンク氏がサンタ・ローザに苗木業を始めていた。此人は植物の改良



併し彼は結婚の為に帰朝したのでなかった。目的は下の如くである。

一八九七年某米人を通じて墨国シノロワ州トポロバンポ港附近五十哩四方の農耕地が売物に出たことがある。此の耕地売却の話が鼎君の耳に入り、資本金調達のために帰朝することになったのだ。当時この大区域の耕地は凡そ三百五十万弗ほどの資本で経営が出来る計算であった。そこで二百万弗を日本に於いて調達し、其他はトーマス・ハリス、鼎君等で調達する計画であった。この目的の為に彼れは漂然として帰朝の途にいたのであった。故郷を出てから実に三十三年目である。

### (十五)

#### ◎故国訪問の譚

「少小家を離れて老大にして回る。

郷音改むる無く鬢毛摧く。

兒童相見て相識らず。

笑って問う 客は何処より来たると」。

〔賀知章の詩〕

三十三年間外国に生活し、在米邦人との交際稀なる鼎君帰朝の報は郷里の親戚を驚かした。彼れは少時家を離れたのであるから日本語は皆忘れたであろうというので鼎君の生家磯長家では、相続人たる海洲君、甥に当る本田幸助君（現帝室林野局長官）を始め、令弟赤星彌之助君等協議の上、鹿兒島出身で英語堪能の人を選抜し、一同彼れを横浜埠頭に迎えた。一同

が特別仕立の小舟で彼れを甲板上に迎えると「わや彌之助か」と令弟赤星君にむかつて第一声を上げ、次いで磯長海洲君にむかつて「わや、おいどんを知つちよらんだろうナ」とやらかした。一同は面食らった。皆目日本語を忘れていらる筈の鼎君が昔ながらの鹿兒島弁を流暢に使用したので、通訳者も必要が無くなった。此の逸話は今に郷里に残っているそうである。

○ ○ ○

郷里の親戚及び先輩諸氏は久しぶりに鼎君が帰朝し、そして未だ無妻で居らるるから色々相談の結果、窈窕たる淑女を物色して縁談を申込んだ。所が鼎君には更に感激がない「おりや、すいこつが、うえから、おめはいらん」（おれは、する仕事は沢山あるから女房は入らん）取り付く島もないほど、すぎない返事。親族一同再び縁談を申出づる者がなかった。鼎君の劍幕から察するに、若し再びそんな面倒なことを言う奴は打斬られそうであるのだ。

鹿兒島健児社時代の気風は、青年が女に関係すると其社から放逐され、袋叩きに遭うたものである。鼎君は健児社時代に人となり其気風を受けたまま海外に出たのである。そして彼は物心を覚ゆる頃、ハリス先生の下に田園生活を続け社交界遊蕩の味は全く知らずに過ごしたのであった。一言にして謂わば彼れは少年の純潔を破壊せずに四十余年を経過したのである。而して彼は七十三歳の今日と雖も健児社の純潔を保っているのである。

## (十四)

## ◎在米邦人と鼎君との關係

鼎君は本国を出てから約二十六年間、日本人と交際する機会が乏しかった。一八九一年（明治二十四年）珍田捨巳桑港領事として赴任す。鼎君はこの時始めて日本人と交際し日本語を以て話す機会を得たのである。

珍田捨巳君（前英米大使伯爵）は明治十年佐藤愛麿（前米国大使）外二名と青森県弘前に伝道していたイング氏の周旋でインデアナ州デポー大学に入学したことのある人だ。英語は頗る達者でよく書生の世話をやき名領事と称せられた人である。鼎君が此頃から日本領事を知り興味を日本人にもつたのは珍田領事の吸引力が与つて力あるのである。此当時より彼れは領事館員、正金銀行——此頃は鍋倉直という人が桑港出張所主任——等と交際し、久しく忘れていた日本語をポツポツ話すようになった。

鍋倉直は鹿兒島産であつたから鼎君との對話には好相手であつたらしい。

鼎君経営の農園では最初支那人が働き、それから伊太利人、それから日本人と変遷したのであつた。日本人で同園に働いた人は塚本松之助君等が最も早い方で、それが明治二十五年頃と考えられる。

一八九六年（明治二十九年）鼎君の甥伊地知共喜氏其農園に入る。以来約三十年間共喜氏は鼎君を助けて農園及び醸造所の監督をしていた。鼎君の日本語は甥君の入園から愈々上達したのであつた。

共喜君入園当時のことを語つて曰く

「伯父の日本語は頗る変なものでありました。私は英語が上手でありませんから、何でも日本語で話をしました。伯父の日本語は「ランプを点せ」というても「ランプを焚け」という。或る時領事館で茶碗蒸しの日本料理があつて「茶碗むし」の冷ない内に召上れ」と奥様が申された所が「虫を喰うのは嫌いだ」というて一座を笑わせたという話があります」

## ◎酒蔵の焼失

好事魔多しとかや、鼎君農場の基礎を確立し、葡萄酒醸造の技大に進み、遠くフランスにまで輸出するに至つた一八九二年（明治二十五年）に酒蔵から火災が起つて全焼した。此時鼎君は火事の最中に「やあ面白い面白いアルコールが火の玉になつて飛ぶわ」と言つたので、働いている人々は鼎君が気が狂うたと思うたそうである。鼎君はそんな事で気の狂う程小心でなかつた。全く面白いから面白いと言うまでであつた。

鎮火後彼れは早速倉庫再建の業に従事し半年ならずして以前に倍する酒蔵を建築した。現在三十七万ガロンの酒を貯えて居る蔵がそれである。

## ◎第一回の帰朝

鼎君はハリスさんに連れられてサンタ・ローザに來たり、葡萄を植え、酒を造つて数十年間單調の生活をしていたと考うる人は彼の心中に燃えている事業熱を解せざる人々である。彼れは一八九七年（明治三十年）漂然として帰朝した。世人は下馬評を逞うして言うた「鼎さんも妻君が欲しくなつたので結婚の爲めに帰朝したのであろう」と。

トーマス・レーキ・ハリス、ミセス・リクワー、リクワーの男子(十一歳)、長澤鼎、新井常之進 計五名

一行を乗せた汽車は西に走る。山川の風物すべて目新しく、シカゴ、オモハ、オグデンを経てネバダ州カーソンに着く。此処は汽関車中継所で町は小さいけれども東部から来る移住者の動静を報道するため、新聞探訪者が集まっていた、一行の来加を桑港に打電するのであった。

此時桑港駐在帝国領事は高木三郎とて桑港最初の日本領事である彼は一行を迎え色々の世話をしてくれた。一行は桑港に着くや、コスモポリタン・ホテルに投宿した(このホテルは其当時パイン街とモンガモリー街の角に在った)

一行はそれよりサンタ・ロザに到り、グランド・ホテルに投宿しハリス、長澤は附近のフィルス・バーグに売地あるを聞き視察に出掛けたが、満足が出来なかつたので引き返し、更にサンタ・ロザから三哩北方のファントングローブに地を相し四百エーカーの山林付土地を買収した。この頃一エーカーの代価は五十弗であつた。

既に土地買収も首尾よく済んだので、鼎君等はサンタ・ロザのホテルから徒歩して買収地たる山腹に四室のバンガローを作り一方にはテント二個を建てた。

それから同年七月本家屋及び既の建築に取掛かつた。この頃建築に要する材木はガンウィル町から八頭立の馬車で運んで来た。そして同年十一月

に家屋建築の事業を完成した。

この時ノース・ウエスタン鉄道はサウサリトを出発点とし、クロバゲルまで開通していた。農場のバンガローが出来ると否や、彼等は山林の開墾を初め大麥を蒔き付け、牧畜業を始めた。鼎君は予てブラクトンで学んだミルク絞りをなし、それをサンタ・ロザ及びファンテンの町に売った。

一八七九年(明治十二年)ヨーロッパ殊にフランスでは葡萄の虫害があつて、その大部分の葡萄は全滅した。この報道を得たる鼎君等はこの地に葡萄を植付けることを有利と考えた。そこで支那人労働者を雇い入れて山林の開墾をなし葡萄を植付けたのであつた。それから三年の後に葡萄酒醸造所及び倉庫を建築した。

一年増しに農園は発達して来た。牛豚の数も殖え、馬も数十頭になり、一八九一年(明治二十四年)頃には農場の基礎も確立して来た。この二、三年ハリス氏は兎角身体が健康でなかつたので、同年ニューヨークに向けて旅立たれた。鼎君この時からこの農場を經營し、一八九五年には続地千六百エーカーを買収して二千エーカーの大農場を作つたのであつた。この間鼎君の勤勉力行は常人の企て及ぶべからざるものがあつた。

ハリス氏がファンテン・グローブに土地を購ひ鼎君を両腕として十六年間の經營は独りファンテングローブの歴史を飾るのみでない。附近一帯にかけてのパイオニアとして、葡萄栽培家として加州の歴史に閉却すべからざる功蹟を残しているのだ。

田園に止まっていた)

森、鮫島が帰朝した明治元年六月は鼎君が十六歳の時である。彼れは同学生と別れて唯だ一人となった。彼れは引き続きハリス氏を助けて農業にこそしむ且つ学業を修得した。

ブラクトンに於ける三年間は日本が王政復古の大業を完成し、將に世界に覇たんとする大進運期であった。此間森有禮は米国に、鮫島は英国に公使として赴任した。時は明治三年十月五日（一八七〇年）鼎君十八歳の時である。

### ◎森、長澤の再会

明治三年十月、森有禮少弁務使を拝命し米国最初の公使となる。時に二十四歳、実にお若い公使であった。鼎君は十二月の雪を踏んで森君をワシントン府に訪うた。此の時森は長澤に帰朝すべきを説いた。併し鼎君は遂に帰朝せざる事となった。鼎君此の當時を語りて曰く

「ワシントンで森に会ったところが、彼は僕に国に帰らんかという。宜しい今直に帰って行こうかという、イヤ明年僕が帰るから一緒に帰ろうじゃないかという。明年のことをいうと鬼が笑う。そんなら僕は日本に帰らない。生涯アメリカで暮すというた。森は貴様は強情でいかんという」  
 まるで子供の喧嘩のようなことを言い合うて別れたのであった。仲のいい友達はお互いに我儘を言い合うものらしい。併し鼎君が「今帰るなら帰る。明年の事をいうと鬼が笑う」というたのは彼がハリス先生から受けた

哲学らしい。ここに彼の単純無垢の真面目が躍如として現れている。

彼れは再びブラクトンの農園に帰って馬の頭を撫でた。

森有禮はワシントン赴任の時、仙台人新井常之進という者を帯同した。此の人は鼎君と共にブラクトン農園の客となり、後年加州移住の一行に加わり約三十年間フワントン・グローブの山荘に仙骨を養うていた人である。其後日本に帰り今は鬼籍に入った。

### (十三)

### ◎加州移住の経路

一八六八年（明治元年）ブラクトンに移住せるハリス氏等は居ること七年、また加州移住を企てた。一八七五年（明治八年）ハリス氏年五十二、長澤年二十三、ハリス氏老いたりといふべからざるも、ブラクトンの冬は降雪多く寒気零度以下にくだるが故に寒氣身にしみ、農耕地としては理想的でなかつた。而して此の当時加州は新たに大陸横断鉄道を完成し（大陸横断鉄道の完成は一八六九年五月十日、明治二年）加州人は盛んに其有望の新天地を東部に広告せる時であった。ハリス氏及び鼎君等は雑誌其他の報告によりて加州の有望なるを知り、一八七五年（明治八年）いよいよ加州永住の決心を堅め、必要な品物を買ひ求めて荷造りし、一行の出発に先んじて移住予定地なるサンタ・ロザに送り、住みなれしブラクトンの雪を踏んで大陸鉄道に乗り込んだのは二月半ばであった。此の一行の姓名左の如し。

謁せしむべきを議し強藩薩摩、肥後、土佐、越前、長州の連署を以て朝廷に建白書を捧呈した。これより天下沸然として動揺し、堺の佛兵殺傷事件、英国公使一行殺傷事件、鳥羽伏見の戦、江戸城の攻収、東北の激戦等日本は内乱外交ともに空前の危機に瀕した。

此時ハリス氏神託を森、鮫島等に告げて曰く『日本帝国は今や国難の急にあり、二子速に帰朝し国事に尽すべし』と。ハリス氏は兩人に旅費を与えて急ぎ帰朝せしめた。時に明治元年六月であった。(長澤鼎氏直話及森有禮伝に処る)

## (十二)

### ◎梁山伯員の論争

森、鮫島帰朝の前後、ブラクトンには色々な日本人が尋ねて見えた。紅葉山泥棒事件の関係者であった村田、野村と名乗った二人も来たり、仁禮有池<sup>マ</sup>、久松の諸氏も尋ね来たり働き且つハリス先生の教えを聴いた。一時は十余人の日本人が此農園に集まり梁山伯の光景を呈したことがあった。

是等の壮年は世界列国の批評及び人物の長短などを評論したが、或日のこと「若し日米戦わば何れに加担する乎」という論題が出た。或者は戦闘の際中立をまもると言う者もあり、或者は米国を敵として戦うべしという者もあつた。そこで此議論の裁断をハリス先生に求めた。此の時ハリス氏は一同に告げて曰く

「予は日米間に戦争は起らないことを確信する。然し若しありとせば我等

は神の為に戦うべきである。我々は世界の公平と正義により其是とするものに與すべし。米国も日本も区別がない。唯神の命ずるところにより正義の為に戦うべきである」

ハリス氏の所説はどこまでも世界的であつた。併し日本壮士の胸はそれに満足が出来ない。どこまでも日本の為にのみ戦わねばならぬのであつた。即日吉田、畠山、松村等は憤慨を洩らして此田園から去り、鮫島、森、長澤は此処に止まったのであつた。(村田、野村の義賊は依然ハリス



長澤鼎氏の大恩人たる

トーマス・レーキ・ハリス氏晩年の撮影



向って右より 〔前列〕 畠山義成、市来六右衛門、中村博愛、松村淳蔵  
 〔後列〕 森有禮、吉田清成、鮫島尚信、野村盛秀  
 此写真中市来と野村は慶應三年英国に渡りたるを以て未だ髪を結び居れり  
 〔慶應三年五月四日森氏等米国移住告別記念撮影〕

たのであった。

鼎君曰く

『ハリスさんの宗教は深遠な予言で到底我等には奥義が解せられない。其教旨は瑞典スイソランボルクの開創せる『スイデンボルヂナン』に原因したもので、今の基督教を以て基督真正の目的に反せるものと観たものである……神は男と女の二つより成り、此世に黄金世界を樹立することが目的である……ハリスさんは日本の国風を愛し、森、鮫島等に会し日本の風俗民情を聞き、且現今の基督教に浸染せざるは日本及びアフリカの某州あるのみで、日本は今日に於いて其侵入を防ぐの計を講ずべきを説いていられた。ハリスさんの哲学は、印度哲学によく似ている』

ハリス氏は鼎君渡米の頃、アネニアという所に農場を所有し、鼎君は其葡萄園に苗木を作る労働に従事し、森君はベーカリーの仕事を覚えケッチン働きをなし、そして日曜日には洗濯をした。

翌一八六八年（明治元年）ローレンス・オレフワント氏の母の紹介で紐育から三十哩ほど西方、ブラクトンという所に千五百エーカーの売地あるを買収し、ハリス氏始め学生等はこのに移住した。森はクック兼ハウス・ウオーク、長澤は牛飼いミルク絞りを受持ち、時時山に葡萄のステッキを切りに行った。鼎君は此時より農業に関する知識を養ったのであった。

#### ◎森、鮫島等の帰朝

明治元年二月七日、晃親王及び三條實美、伊達宗城の議定官世界の大勢を察し、外交の急務に鑑み鎖国の旧習を排除し、各国公使を朝廷に参朝拜

育を授けることが出来なかった。彼は米国に渡るや否や、或は新聞配達夫となり或は他家に雇われた。而して其得たる金を以て書籍を買い、夜遅くまで勉強した。彼は十三歳から全く学校生活をしないで独学したのであった。而も彼は三十歳の頃は巨然たる思想家となり。一個の新宗教を発見し

過半を奪う。然れども偏地にして利益多からず。故に転じて対馬を握らんと欲して英佛之を防ぎて遂に握る能わず。斯の如くにして彼れ末だ一の港を得ず。故に今窃に猫智を抱き鷲爪を藏して、外客頻に神妙を飾り、内には狼心を養い、召寸間を狙う。故に先年我国人露国人を殺せし時もさまで問もせず、却て我国人を惠過する事著し。又彼れ我国人に露行を勧むること甚だ切なり。すでに去年幕府に迫り幕生七人をして遂に行かしむ。過情斯くの如し。彼の狼心あること更に言うに足らん』

又米国の事情に就きて左の如く記している。

『米国は今開国を去ること漸く二百年、国家の大小となく、悉く万民と謀り、公平正大の政事をなす。唯今世界に於て突然たる事世人皆知る所なし。尤も西洋人皆云うに後世起る所米なりと。殊に英人は米人を諱候えども是亦同説なり。御照察下さる可く候。私窃に勘考仕り候にともに親交を結び有無を通ずる処此国なりと着眼仕り候。此国当時外国に念を掛け候儀曾て之なし。故に彼の国四年間の永戦（南北戦争をさす）此の頃漸く治まり、國中末だ一統せず。其上後背には総て英の領分之有。脇にはメキシコありて腹心の病末だ全く癒えず。先ず是等を統一して然る後四方に手を振うべし。未だ外念なき事御照察成さる可く候（下略）』

英国留学の人々は藩命に出で、其主意たる各其長技を学び後來藩政に資せんとするに在るから、其の学業に必要な資金を供給し其の目的を遂げしむる予定であった。然るに当時国内極めて多事、人心鼎沸、特に鹿児島

藩の如きは内乱の当時者であったので、海外留学生を養う能わざる時運に際会した。そこで一同は英国を去らねばならぬ事情に迫ったのである。

此の時恰も善し、米国からトーマス・レーキ・ハリス氏が佛国博覧会見物の為英京ロンドンに立寄られた。鮫島、吉田、森相携へて旅館にハリス氏を訪い、渡米の志を告げ、援助を請うた。

## (十一)

### ◎米国に移住す

トーマス・レーキ・ハリス氏は予てより日本の風俗習慣をローレンス・オレフワント氏より聞き、且昨年の夏鮫島、吉田の両青年に会い大に彼等を愛したのであったから、彼等学生が学資に窮せるを聞き米国留学の後援者たるべきを快諾せられた。ハリス氏曰く『米国に渡ったならば半日位働いて其余暇で学問すると宜しい』と。一同は大に喜び、米国渡航の事に決し、鼎君をも加うることとしスコットランドに在る鼎君に出発を促した。此時森二一歳、長澤鼎十五歳五ヶ月であった。

森、長澤、鮫島、畠山、吉田、松村の六名は慶応三年六月（一八六七）年）英国を去り、米国紐育州トセツ郡ワッセーなるハリス氏の邸宅に客となる。

茲に一行の恩人たるトーマス・レーキ・ハリス氏の事に関し見聞の次第を記す。ハリス氏は一八二二年英国に生れ、一八三五年十三歳にして父母に伴われて米国に移住した。彼の父は貧しき一移民であったので充分の教







の遺憾に堪えざる所なり。如何に我も君に對し申訳なし』と繰返し繰返し詫たるに諸士は声を揃へ『否々決して、さあるべからず。假令隊長の命に従いし事なればとて、其行為に至りては我々此兩隊は將卒一体の運動に外ならず。如何ぞ罪を隊長のみに歸し、我々死を免るる理あらんや。我々予死は覚悟の事なれば御心置き全く御無用なり』という。兩隊長其忠義の切なるに感じ、頗に謝辞を述べ。熊本藩士感じ入り、諸君が死に臨み従容たるは実に武夫の亀鑑なれば後日歸郷の土産としたし。何なりとも一筆書て給われと請う。諸士之を諾して思い思いに書き残しけるが箕浦は一艶を作つて曰く

除却妖氛答国恩。

決然豈可省人言。

唯教大義伝千載。

一死元来不足論。

西村は歌を詠じて曰く

風に散る露となる身

はいとはねど心に

かかる国のゆく末

酒肴出て、諸士快よく飲食せり。準備既に整いて諸士將に出場せんとせしに、天の涙か、今迄晴れたる空は俄に掻き雲り、大雨沛然として盆を覆すが如く、場内の混雑言わん方なく、正午に始むべき筈なりしが延びて午後四時に至れり。箕浦第一番に呼び出さる。割腹の場には見親王を始め、

東久世少將、伊達少將以下薩、長、藝、肥後及び土藩の警衛士、檢視の官吏等順次に列を正して居並び、佛人は公使を始め其外二十人計り小銃を携え、椅子に着きて臨檢す。箕浦泰然として壇上に端座し、先づ我檢視の諸官に敬礼し、一声高く呼んで曰く『フランス人共聴け。己は汝等の為めには死なぬ。皇国の為に死ぬる。日本男子の切腹をよく見て置け』と。徐に短刀を抜き、腹十文字に掻き切り、臟腑をつかみ出し、佛人に投げんとす。介錯人箕浦の首を撃つ。あやまって上部に中り深く入らず。再び撃つ。首末だ落す。箕浦大声を発し『まだ死なぬ』という。三たび撃ちて首落たり。箕浦、年二十五。その剛膽不敵の挙動には衆みな舌を捲いて驚嘆す。佛人は慄然として面色を失し、正視するを得ざりき。次に西村壇上に上る。諸官に礼し、劍を抜き左腹より右方に引廻す。刀浅し。再び突込み、引いて半に至る。介錯人一撃して首前に飛ぶ。西村、年二十四。第三番に六番隊小頭池上彌三吉壇に上り、腹を撫真一文字に掻き切る。介錯人一刀に首を落す。第四番に八番隊小頭大石甚吉、従容として席につき、諸官に礼し佛人を睨み、腹十文字に掻き切り、静かに血刀を座右に置き、遙に佛人を睨み両腕を張りて『介錯人頼む』と呼ぶ。介錯人声に応じて一刀を下す。浅くして切れず。再び切る。また切れず。再三再四するも首なお落ちず。七度目にて始めて首おつ。この間大石は少しも動かさず毅然として平常の如く、有司皆色を失し、佛人愈々恐怖し四肢悉く寒戦す（此稿続

乱入し、傲慢無礼至らざるはなし。隊卒を指揮して之を制止すれども通弁一人も伴わざるを以て言語通せず、止むを得ず補縛せんとせしに、軍監より制止の命下りしかば如何ともする能わず。とやかく訊問する中佛人隙を窺いて逸走す。その中の一人は我軍旗をさえ奪い去れり。隊卒之を追う。漸くにして軍旗は取返したるが、佛人既に小船に乗りて陸を離れんとし、短銃を乱発する小面の憎さ。今は是迄なり。此儘去らしめては神州の恥辱なり土藩の恥辱なりとて、隊長命を下し小船に向つて射撃す。佛人は三人死し、七人負傷し、一人だけ無事にて佛艦チブレキスに収容せられ、六人海に落て行衛不明となれり。佛公使怒つて我政府に談判して曰く『第一、土佐の兵隊を指揮せし士官兩人、並に手を下したる兵士残らず、日本の官員並に佛国海軍兵隊の眼前に於て刑に処すべし。第二、被害者の家族等扶助の為に土佐侯より十五万円を差し出すべし。第三、親王の内朝廷の外国事務第一等の執政者一人佛船に來り謝すべし。第四、土佐藩主自ら佛船に來り謝すべし。第五、土佐人兵器を帶して開港場を通行し、又土佐人開港場に滞留することを嚴禁すべし。以上五箇條の中いづれたりとも其三を択べ』と。我政府は土藩と交渉の上第一、第二、第四を択ぶこととなれり。刑に就く者につき箕浦、西村は隊長のみ死して隊卒を助けんことを乞ひしかど、朝議之を許さず。覚えのある者は自ら各名乗出よと命ぜしに、隊長始め名乗り出たるもの三十九人ありき。然るに朝議二十人を限りたれば小南六郎右衛門神前に御圖を引かしむ。隊長の箕浦、西村小頭の池上彌三吉、大石甚吉は引かず。卒の三十五人にて引けり。御圖に漏れたる者の

中、中城淳五郎、横田静治郎、榮田次右衛門、田丸勇次郎の四人は書を上りて同じく死につかんことを乞う。朝廷の有司其者を感じたるも、人数既に定まれるを以て之を許さざりき。死につくものは卒の十六人、隊長二人、小頭二人を合せて二十人也。小頭以下はいずれも身分賤しき足輕にて、平生藩内にては苗字を名乗るを得ず、下駄を穿くを得ず、絹布を服するを得ざりしが、今回特別の詮議を以て士分の格式を仰付けられ下駄、絹布をも許さる。刑は斬り首ならで切腹也。これ士分の刑にして足輕に取りては一期の光荣也」(此稿つづく)

#### (八)

#### ◎妙国寺腹切事件の統

「屠所の羊のそれならで、勇んで出で立つ海南男子の死出の旅、生れて始めて着たる絹布はればれしく、始めて穿ちたる下駄の音高らかに踏み鳴らす間もなく駕籠に載せられて藝、肥兩藩の士二百人に護衛せられて、堺の妙国寺に赴く。実に明治元年二月二十三日也。これまで此処を異にせし兩隊長、ここに十八士と相見えて『遇般当地に於て佛人討攘に及びしは全く我等兩人の指揮せし所にして、諸士の関知せる所にあらざるは言を俟たず。就ては上裁を以て割腹の命を蒙ると雖も、罪科は我等兩人に止まりて、諸士に及ばざる訳を以て、我等兩人に於ては度々此儀を上申し、我等兩人自裁を遂げて其罪を蒙り、諸士は悉く皆宥免あらんことを乞いたれども裁可を得ず、遂に諸士までが割腹の上裁を受くるに至る。実に我々兩人

なかつたので珍らしがられたものである。或日彼はアポーデン市の繁華な町をキョロキョロとして某写真館の前を歩いてみると、写真屋の主人が彼に向つて写真を撮つてやろうという。そして撮影料は要求しないと言うので早速入つてとつて貰い、数日を過ぎ其の店を尋ね写真を受取りたいという主人は笑い乍ら『あなたの写真はここに掲つて居ます』と看板にした写真をさすのであつた。彼は一杯食つたなと思つたが、喧嘩も出来ないので苦笑して帰つたということである。写真館の主人は小日本人を店頭に飾つて見世物にしたのであつた。

○ ○ ○

鼎君曰く『僕等は人心が附いて後も尚武と学問とを知つて、金勘定を知らなかつた。僕が英国留学の時、藩公からその家族に向つて御下賜金があつたそうだ。僕の兄はこの金を僕に持つて行けという。僕は金なんか入らんと争つた。その結果五代さんが寺島さんにその金を託したようだ。僕は英国留学中どこから学資が来るかさえ知らなかつた』

薩、長、土の諸藩に於て苟くも武士たるものが金の勘定などする卑しいものは無かつたのである。一命を君国の為に捧げる。これが日本武士の信仰であつた。私は鼎君の武士氣質を書く序に当時有名なる妙国寺事件の一節を引いて当時日本武士を追懐したい。

(七)

#### ◎ 武士氣質の真相

鼎君の腕白は英国に渡つてまでも其面目を發揮したことは前号に述べた通りであるが、此当時の日本勤王武士の消息を知るものは必ずしも鼎君を乱暴なる少年とは思わないであらう。

今日経済一点張りの世相からすれば、日本明治維新前後の志士の行動は、クレジーともモツブとも評することが出来るかも知れぬ。併し神州清潔の民はどこまでも清純の民であつた。彼等は感激の詩人であつた。彼等は民族擁護の憂国者であつた。彼等は『ままよ三度笠横ちよに冠り、破れかぶれの頬かぶり』の中に真純の恋を味わう風流人であつた。彼等は其氣骨を經とし、恋愛を緯とし、醒ては天下の権を擅にし、酔うては美人の膝に睡るの哲学をもつていた。妙国寺事件が近世歴史上外国人を如何に驚かしたかは左の記録にて詳である。

#### ◎ 妙国寺腹切り事件

「明治元年土藩の二小隊、朝命を奉じて泉州堺を警衛せしが、二月十五日佛人禁を破りて大阪より妄に通行し来るとの報に接し六番隊長箕浦猪之吉、八番隊長西村佐平治各一小隊を率い、出張軍監杉平太、小監察生駒静次と共に大和橋に至りしに果して佛人来れり。杉、生駒之を制して去らしめたり。両隊帰陣して休息せしに午後四時頃、市民周章来り報じて曰く『唯今佛人突然上陸し、市中は横行乱暴す。直に救助あらんことを乞う』と。箕浦、西村直に隊卒を率いて出張せしに、佛人は人家に押入り社寺に

名関研蔵。通詞堀壮十郎は変名高政一なるを植字の誤りあるを以て左に訂正す。

本名 変名

(五代才助ノ事)

河内 香蔵 関 研蔵

通詞

堀 壮十郎 高木 政一

(六)

◎少年時代の腕白譚

鼎君一夕私に語りて曰く

『僕の幼時は随分腕白でナ。今でも覚えて居るのは十歳位の時、市街を歩いていると十二、三歳の町人の児が僕に向つて何だか無礼な事をいうので、此下司奴と怒鳴りながら追ッ駆た。彼は武士の児が権幕をかえて怒鳴つたのに驚いて逃げた。其児はとうとう樺山家に逃げ込んだ。僕も追ッ駆けて同家に入った。此時樺山資紀の父君は僕を誰何せられた。僕は『町人の児が無礼な言をいうから打ちます』と答えると、老公は『ウン打つてよろしい』といわれた。此の当時町人の児が武士に齒向う場合には打つか斬るかされたもので、それが当然と考えられていたものだ』

鼎君が英国留学当時の心持ちは武士の元氣に充ち充ちたのであつたら、彼がスコットランドの田舎の人々を見た眼には矢張り町人土百姓とし

か映じなかつた。これに就て面白い挿話がある。

或日曜に鼎君は郊外に遊んで居ると、田舎の老人が十三、四歳ほどの少年とドンキー車を駆つて来た。其少年は車の中に積んであつたポテトを鼎君に目がけて投げつけた。勿論それは少年の戯れであつたが、鼎君は大に癪にさわつたので馬車から其の少年を引下して散々に敲きつけた。車上の老人はこれを見て加勢のために降りて来たそうだ。そこで鼎君は手に携えたステッキを以てドンキーの尻をしたたか敲いた。ドンキーは驚いて駈出したので田舎の少年は援兵を失い泣き泣き馬車を追かけ乍ら逃げて往つた。腕白ながら機転のきいた話である。

後年鼎君は語る

『若しあの時代に僕が刀を腰に差していたら、英国の町人や百姓を何人傷つけたか知れなかつたであろう。事情は分らず言語は通ぜず、自分本位で物事を呵成しようというのだから誠に危険千万なものであつた』

『併しこの腕白時代に一つ褒められたことがある。或日郊外に遊んでいると、牧場の傍に一農夫が一人の少年を何の爲めにか知らんが、打つやら蹴るやらしていたのを見た。此の時義侠心がむらむらと起つて其場所に駆けつけ、矢庭に大人の手を取り足がらをかけて引倒してやった。大人は垣杭に頭を打つて傷を受けた。僕は少年を連れて帰つた。此の顛末をガーバー夫人に告げると『ユー・オーライ』とほめられた。スコットランドには日本の武士氣質があるようだ』

鼎君がスコットランドに留学した頃は日本人は実に同国中一人しか居ら

四男彦輔は七、八歳の頃から非常に記憶力の強いものと見え、四書五経の文句、唐宋の詩などを暗記したので、来客のある毎に詩文の朗読をなして人を驚かしたということである。孫四郎君が海外留学の事あるにあたり、特に十三歳の彦輔を抜いたのは其児の優秀なるを認め、藩公も亦夙にその令名を聞いて留学を許可したのであろう。

鼎君の幼年時代は日本が将に幕府政治より離れて、王政復古に向わんとする大転回期であった。明治維新大業の中心たらんとする薩摩藩は尚武の気を以て充ち充ちていた。世に有名な薩摩健児社は鼎君の幼児に生まれたる神州銳気の結晶であった。山陽が鹿兒島人を謡える詩は後世人に取りては詩人の誇張的感激と見るかも知れないが、事実山陽は此謡に於いて薩摩青年の小部分を描写するに過ぎないのである。

前兵児謡 (山陽)

衣は胛に至り袖腕に至る。

腰間の秋水鉄断つべし。

人触るれば人を斬り馬触るれば馬を斬る。

十八交わりを結ぶ健児の社。

北客能く来らば何を以て酬いん。

弾丸硝薬是れ膳羞。

客猶属厭せずば好し。

宝刀以て渠が頭に加えん。

健児社は十五、六歳から二十五、六歳ほどの青年が国事のため献身的犠

牲の団体であった。青年等が身の丈けに余る大刀を腰にして夜間に辻切りをする。毎日夜晩『試し切り』が絶えない。遂に藩公から『故なく人を斬るものは死罪に処す』という命令が下った程である。文久三年生麦に於いて英人四名を殺傷した事件も此健児精神の発露に過ぎないのであった。

此殺伐の時代に人となった鼎君は十歳頃から剣術、柔術を習い健児社の候補者であった。彼は文学の天才ありしたため留学生の一人として海外に出たが、薩摩の特長たる英雄の気を其のままに洋服を着横文字を習うたのであった。俗にいう和魂洋才というのであった。

一人ぼっちになってスコットランドの中学校に通うた頃、彼はその鬱勃たる薩摩男子の気風は折にふれて発した。彼は此地に唯一の日本男子であった。学校の往復に同年配の児供と何かの事で争論が始まると、彼は其胸間の懐中時計を腰間の秋水に代えて打合を始める。此事に就いて鼎君は語る。

『私の持っていた時計は銀時計の厚いのでありました。クサリは金で太い丈夫なものであった。喧嘩になると其の時計をポケットから抜きとり、クサリをつかんで敵を打ってやりました。時計は時を見るために用事が無い。全く喧嘩の時の武器であった。ガーバー氏は私の乱暴を恐れて大小はどこかに仕舞込んであったからナ……ハッハ、ハ、ハ、』

(正誤) —本稿第一中、五代才助寺島藤助等藩主島津斉彬公に謁し云々とあるは藩主島津忠義公の誤り。又本稿第二中、町田清蔵の変名流水賢次郎とあるは清水兼次郎の誤り。又留学生の外に河内香蔵(五代才助ノ事)変

兄安武に贈りたる書簡に依りて大要を知るを得べし。茲に其書簡の要領を掲げんに、曰く學問に精勵せり。曰く敢為の氣象に富めり。曰く健康を保全せり。曰く父兄に順良なり。曰く友誼に厚し。曰く中外の觀察に周到なり。曰く平和なる開港論者なり。曰く露國は強ならず義ならずとの主説を持せり。曰く米國を以て善隣尊ぶべき國と認めたり。曰く英語を以て學問の捷徑と認めたり。曰く法制の學は日本の事實を暗じて折衷すべきなり。曰く幕府の因循無策を洞觀せり。曰く鹿兒島教育の盛大を企望せり。曰く熱心なる憂國者たり。蓋し先生（森）は時齡未だ若冠ならず遽に英京に學ぶもの豈世故の經驗あらんや。而して其眼光の超邁、所説の精深、誠に尋常の比すべきにあらざる也。

○ ○ ○

按ずるに鼎君等英國留学の時、森金之丞（有禮）は十九歳であつたと思わる。鼎君に質すけれども幼年時代のことであるから、分らんとする。そこで私は有禮の父が乙丑二月（慶応元年）に作つた詩から彼の年齢を考えて見た。詩に曰く

次五代氏送別韻與兒有禮即

十九阿兒出廬州。宛然轉得掌中球。

普知皇國一正氣。六合星聊五大州。

そこで森は十九歳、長沢より六歳の長者であつたことが分る。

五代才助（友厚）は天保六年十二月生れとあるから英國留學生を監督して渡歐した時は正に三十歳の壯年であつた。

鼎君渡歐時代を語りて曰く『年長者は最初ロンドンの大學に入ったが私はスコットランドの中学校に送られました。それはロンドンに着いてから二カ月後のことでありました。スコットランドのアポデーン市のジムネーシウムという中学校は正確の英語を教えるという評判で、各國から生徒が集まつたのであるが、私はトーマス・ガーバーという人の後見でその中学校に通うようになりました。イヤハヤ乱暴というたら今から考えると実に驚くべき程でな……』。

（五）

◎少年時代の腕白譚

一行と別れてスコットランドに一人ぼっちとなつた鼎君はガーバー夫人を伯母さんにして此家で可愛がられたものであつた。私は此機会に於て鼎君の幼時の事を少しく記して見る。

鼎君は薩摩の士、磯長家に生れ父を孫四郎といひ母をフミという。兄弟姉妹八人。長男彌九郎、次男喜之助、三男平八郎、長女トク、次女モリ、三女コマ、其次が四男彦輔で、これが後に長沢鼎というのである。其次が五男彌之助、後に赤星家を相続し海軍の受負いを業とし、骨董家の泰斗として有名なる富豪となつた。

父孫四郎は薩藩の儒者で名筆の聞こえ高く、当時の碑銘は多く孫四郎先生の録する所なりと伝えられている。且代々鹿兒島天文台を司つていた所から見ると当時の天文学者であつたのだ。

のみである。併て、長沢鼎君等は『五代友厚伝』の記者が言う如く帆船で上海に渡ったのでもなく、且異様の風彩で外国人を驚かしたのでもなかつたことは長沢君の直話で分つた。

鼎君曰く。『私は十三歳の時藩公の選抜によつて英国留学の一群に加わりました。其頃はみんながチョン髷を結うていたのでありますが、外国人は髷などを結わないということを先輩に聞かされ、羽島で英国汽船に乗る時、髪を斬つた。同行者町田誠蔵も斬りました。私等二人だけ汽船に乗る前に斬りまして、それを故郷に届けました。』

鼎君が出発に際して家庭の忠僕金太というのが船まで送つて行つた。十三歳の若さんが何萬里の異国に行くといふのであるから国の為め民の為めとは申ながら両親の心配はなみなみでなかつたことは想像にあまりある。特に母の身になつて考えると。身を切るほど別れが悲しかったであろう。鼎が出発の跡で地駄ん太を踏んで泣いていられたそうである。

忠僕金太は、羽島で若さんの髷を切り、其髪を懐中して鼎君の母に奉つた。母は其の髪を抱きながら泣きくずれたといふことが鼎君の家族親類に伝わっている。実に真実の話柄である。

一行はオースタラニン号で香港に着し、約十日間此処に滞在し諸般の準備を整えた。鼎君は此頃の事情を左の如く語る。

『私と町田誠蔵とは羽島で艇に乗る前に髪を斬つたが、五代才助（友厚）と寺島藤助（宗則）と、堀壯十郎と、家老の新納刑部との四人は髪を斬らなかつた。彼等は直に日本に帰る筈だから残していたのであつた。其

他の留学生は船中で髪を斬つたり、香港で斬つたりしたが、香港を出発して英国に向う時には右四人年長者を除くの外すべてザンギリになつた。

#### (四)

鼎君一行は香港から英国郵船に乗換え、シンガポール、ピーナン、ホイゴンゴ（セーロン南方の港）ボンベ、エデンそれからスエズ地峽を汽車で越した。此頃スエズ海峽はまだ出来ていない故、汽車でアレキサンドリアまで行くのであつた。

アレキサンドリアから伊太利の南端モーターに寄港し、それからジブラルタルの海峽を通りぬけ、英国サウサンプトンに着いたのは慶応元年五月二十三日であつた。

即夜汽車でロンドンに至り、豫て定められたるケンシントン・ホテルに投宿した。

森有礼伝に曰く（慶応元年）五月二十三日英国サウサンプトンに着し、即夜倫敦ケンシントンホテルに投ぜり。此間経る処の地。香港の瓦斯に驚き、印度洋中に氷菓を食うて驚き、倫敦に電信を見ては又驚きしと云えり。真に然りしならん。斯くて同行の士は皆倫敦大学教授ウィリヤムソン氏の懇切なる斡旋に依り倫敦大学に入り、各其目的の学科を修む……やがてケンシントン・ホテルを出でベースウオートの寄宿に移り、更に教授グリーン氏と同居す。而して先生は（森有礼をさす）英国に於いて如何なる経歴を得たりや又智識上に如何なる感化を受けたりや、先生の



而して我長沢鼎君は変名を实名として約六十年間米国に踏止まり、在米日  
本人農業家の卒先者として現存している。洵に珍中の珍として伝うべきも  
のである。

(寺島宗則の幼名を藤藏又は陶藏と記したるもの世間に多い。本稿磯永  
氏の手記によれば藤助とあり、尚考うべし)

(三)

長沢鼎君等が英国留学に際して何故に変名を用いたかというに日本は徳  
川時代に入るや耶蘇教徒追放策を勵行すると同時に鎖国の方針を採り、海  
外に出づるものはすべて死刑に処したのであった。此法律は慶応三年まで  
継続したのであった。それ故元治二年(此年四月八日改元して慶応元年と  
なる)長沢氏の出発当時は幕府を憚り一行すべて脱藩を名として海外に出  
たものである。既に脱藩逐転である以上は変名を用いざるを得ないのであ  
る。

彼等ら一行十九名は元治二年三月二十日、鹿兒島を出発し、約十里の東  
なる羽島に至り、英国ガラバ会社の所屬汽船オースタラリン号に搭じ、香  
港に向つて旅立った。

(註)薩藩留学生出発の道中に関し数説あり。五代友厚伝に曰く……鹿  
兒島県下なる一小村落串木野港より帆前船に乗じて先づ上海に向つて発錨  
す……斯くして一行は無事上海に着し英国汽船に乗りかえ黒煙濛々と

此写真は長沢鼎氏が英京倫敦に着し始めて洋服を着けたる時のものにして  
年齢十三歳なりき



して逆巻く波浪を蹴て太平洋の真唯中に乗り出したり。是れより先一行の  
上海に着するや此珍妙奇烈なる一行の異風を見んとて当時上海に滞留せる  
欧米の各人さえ打ち交じり海岸に蝟集笑うもの罵るもの相續いて起り  
騒々しき事限りなく、為めに海岸一帯は時ならぬ人の山を築きたりとい  
奇観を呈せり云々。

森有礼伝に依れば右と全く事実を異にし、余の調査せるものと大差な  
し。但し森有礼伝を書いた記者は鹿兒島の地理に疎きたため若干の誤謬があ

諸課

| 本名             | 変名     |
|----------------|--------|
| 一海軍 町田 民部      | 上野良太郎  |
| 一海軍 村橋 直衛      | 橘 直輔   |
| 一陸軍・大砲 名越 平馬   | 三笠政之助  |
| 一陸軍築城兼 畠山丈之助   | 杉浦 弘蔵  |
| 一造船 町田 清蔵      | 流水賢次郎  |
| 一機械学 磯永 彦輔     | 長沢 鼎   |
| 町田申四郎          | 塩田権之丞  |
| 東郷愛之進          | 岩屋虎之助  |
| 一運用測量機関兼 吉田 巳二 | 永井五百助  |
| 市来勘十郎          | 松村 淳蔵  |
| 高見 弥一          | 松元 誠一  |
| 森 金之助          | 沢井 鉄馬  |
| 一分理医学兼 中村 宗見   | 吉野清左衛門 |
| 一医学物産兼 田中 静洲   | 浅倉 省吾  |
| 一英学 鮫島 誠蔵      | 野田 仲平  |
| 一差引 寺島 藤助      | 出水 泉蔵  |
| 外二 新納 形部       | 石垣銳之助  |
| 河内 香蔵          | 関 研蔵   |
| (五代才助ノ事)       |        |
| 堀 壮十郎          | 高木 政一  |

附記

按ずるに差引とは割当学科名にして現今の所謂政治、経済、財政若くは外交等何れかを意味し遺繰、算段、操縦、掛引（露骨なる言葉を使用するならば）等を含む學術をさしたるものならん。寺島氏後年帰朝して外務の職に就かれたるより察するに蓋し差引とは外交官の意ならん乎。識者の批判を俟つ矣。

大正十二年七月三十日

於朝鮮成驩牧場

磯永海洲誌

○ ○ ○

長沢鼎君曰く『薩藩留學生は一行二十名であつたが、町田某は出発に際し発狂の気味があつたので我々一行より一名を減じ、同勢十九名であつた。新納形部という人は島津家の家老職であつた』

当時留学せるものは後來日本に於てすべて頭要の地位を占めている。森金之丞は有礼と改名して、最初の米国公使（当時辯務少使と称す）となり後に文部大臣となる。鮫島誠蔵は尚信と改名して最初の英仏両国公使となり、寺島藤助は宗則と改名して外務大輔となり、吉田巳二は清成と改名して外務大輔元老院議員となり、五代才助は友厚と改名して大阪実業家の大家となり、堀壮十郎は孝之と改名して五代家の顧問となり、町田民部は久成と改名して元老院議員となり、晚年仏法に帰依し江洲三井寺光浄院の住職となる。市来勘十郎は変名の松村淳蔵を本名とし、海軍中将となる。

鎖国攘夷派は萬延元年三月三日降雪に乗じて大老井伊直弼を刺す。これより攘夷派大に勢力を得、外国人迫害の氣大に起り、文久元年水戸浪士高輪東禅寺の英国公使館を襲い、英人を斬り殺し、文久二年八月勅使大原重徳を護衛せる薩摩の武士、武蔵生麦村に於て行列を横切れる英人四名を傷殺したる大事件が持ち上がった。

此時英国政府は大に怒り、償金四十五萬円を幕府に、死傷者撫恤金十萬円を薩藩に要求した。幕府は償金に応じたけれども薩藩はそんな要求を受け付けない。何となれば苟くも勅使の行先を横切れる無礼者は斬に処するは当然で、償金などは以ての外、英国から頭を下げて詫びるべき筈だと濟まし込んで居たのであった。

英国は益々怒り、文久三年六月十七日、軍艦七隻横浜を發し、同二十八日鹿児島に至り生麦村の撫恤金及び下手人を求めたが要領を得ない。そこで七月二日英艦は薩摩の汽船天祐丸、白鳳丸、青鷹丸の三艘を取押えた。薩は大に怒って砲台から発砲した。英船応戦、市街大火、薩摩の士勇猛、裸体にして戦ったとある。

此戦争に於いて薩摩人は歐洲人の兵術に長じたことを悟った。ウカウカしていると日本は西洋人に取られると勘付いた。

元治元年（一八六五年）五代才助（後に友厚、原名河内香蔵）寺島藤助（後宗則）等藩主島津齊彬公に謁し、邦家百年の計を定むるには海外に留学生を送り、其の文物制度を研究せしむるに在るを説き、其の建白容れられ茲に町田民部外十五名の留学生及び家老新納刑部、監督河内香蔵（五代

才助、後友厚と改む）通詞堀壯十郎を脱藩を名として英国に留学せしむる事となった。

此一行の最年少者が現今サンタローザにある長沢鼎君で彼が留学の当時は実に十三歳であった。

### (三)

長沢鼎君が英国留学に上る時の学生及び諸役人は左の如くであった。

因みに記す、此記録は鼎君の実父磯永孫四郎の手記せるものにして、孫四郎の嫡孫、磯永家の相続人たる磯永海洲の保存するものである。

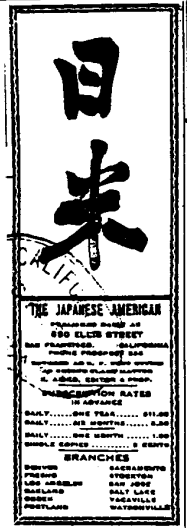
薩藩に保存せられし此当時の記録は西南戦争の時兵燹に罹りて焼失した。故に留学生及び一行を記録せるものなく、伝聞のまま久しく誤謬を伝えられしが、長沢鼎君戸籍変更申請の為旧記の必要起り、現今朝鮮に在る磯永海洲より鼎君の実父の手記にかかる記録を謄写し、茲に始めて正確なるものを得たのである。薩藩海外留学生の課目及姓名を正確に公表せるものは本文を以て嚆矢と思わる。世の史家たるもの本文を参考とし、誤謬を訂正せられんことを一言して置く。

千九百二十四年四月二十九日

フワントン・グローブ長沢鼎君書齋にて記す（尺麿生）

元治二年薩藩海外留学生課目及姓名表

〔磯永孫四郎手記の写〕



# 吾輩の米国生活

鷺津尺魔

(一)

はしがき

上帝の導きによって吾れ吾れ日本人は米国に渡った。学、商、農、労働、浮浪漢、千態萬状、百曲千折、詩乎、劇乎、之をけなせば一笑の夢、之を味わえば千歳の指針。

本文の記者は『米国日本人活歴史劇』の中幕頃に現れた一個の馬の脚である。本舞台の主人公でない。

本文は日本民族の米国生活を描写せんと企てたものである。而して其の活動の人物に対して人格的の論評を加えない。唯だ事実を有りのままに記述することが本文の特徴である。若し夫其事蹟に対する功罪の評論は後世の史家に一任する。

米国に渡った日本民族中近世に於いて中濱萬次郎、新島襄を筆頭とする。記者は是等に移住者として多くの価値を認めない。

筆を長沢鼎に起したるは彼が移住者として最古の歴史をもつからである。

## 長沢鼎君の事

◎日本出発の動機

白髪蒼顔萬死の餘。

平生の豪氣未だ全く除かず。

宝刀染め難し洋夷の血。

却て向う青山の旧草廬。

(水戸齊昭)

鎖国攘夷の重鎮たる水戸藩主徳川齊昭は、攘夷の猷白を血判して野に下った。時は安政三年である。

日本がペリー提督によって開国を余儀なくせられてより、開国、鎖国の両流が幕府内に生じた。徳川齊昭(水戸侯)は鎖国派、大老井伊直弼(彦根侯)は開国派であった。

何れの民族も、他民族と接触せる始めは人種的偏見をもつ。日本人が最初米国人を見たる眼は、全く偏見に充ち充ちてあった。鎖国攘夷の論は但し書なしに一般民衆の歓迎する処であった。

徳川齊昭が『宝刀染め難し洋夷の血、却て向う青山の舊草廬』と詠じたのは彼が満腔の不平を天下に訴えて、日本群衆の血を湧かしめたのであった。

○ ○ ○

## 驚津尺魔 『長沢 鼎翁伝』

門田 明 編

はじめに

長沢鼎は一八五二年薩摩藩鹿兒島城下に生まれた。幼名を磯長彦輔という。一八六五年選ばれて長沢鼎と変名し、他の一八人の藩士とイギリスに留学、スコットランドのアバディーンにあるジムネイジウムという中学校に入學して勉學に励んだ。一八六七年同行の五人とアメリカに渡り宗教家トマス・レイク・ハリスの門にはいつて労働しつつ學んだ。一八七五年ハリスとともにカリフォルニアに移り、以後ワイン生産に専念し同地のワイン産業の発展におおいに貢献したが、一九三四年ファウンテン・グローブの自宅で死去した。一九二四年勲三等雙光旭日章を授与されている。遺骨は一九七九年鹿兒島市の興国寺墓地に埋葬された。

長沢鼎について、著名な日系新聞の記者驚津尺魔の書いた小伝があることは、早くから知られていたが、原典はなく、元住友銀行サンフランシスコ支店長 川勝正之氏の筆記による、掲載新聞『日米』（一九二四年七月十日〜二十九日号）からの写本が流布されていた。長沢研究には重要な資料であり、かつて拙著『カリフォルニアの土魂——薩摩留學生長沢鼎小伝』（本邦書籍・一九八三）に付録として収録した。

このたび渡米滞在の機会があり、サクラメントのカリフォルニア州立図書館で、ながく求めていた『日米』掲載の原典を閲覧し、そのゼロックス・コピーを入手することができたので、本誌に紹介し研究者の便宜に供したい。先にも述べたが、この小伝はアメリカの日系新聞『日米』の一九二四年七月十日（木曜）号から連続掲載されている。表題は川勝氏の用いた「長沢鼎翁伝」ではなく、「吾輩の米国生活」とあり、約三百字の「はしがき」のあとに、小見だし、「長沢鼎君の事」として、「(1) 日本出発の動機」が続いている。長沢についての連載は、第十八回（七月二十七日）をもって終わっているが、この後に「鼎君後記 小長沢の事」として上下二回にわたり長沢の甥である伊地知共喜の長男幸助についての記事がある。第二十二回以後は「歴史的北加」として長沢以外の人物の記事に移っている。

今回長沢鼎を取り上げた全編第一回から第二十一回までを収録した。これを川勝写本と比較して見るに、省略された部分の差異を除けば、相当正確に筆写されていることが知られるが、異同についての詳細は、また稿をあらため次の機会に取り上げたいと思う。

(追記) 1 編集にさいして、重複を避けるため見だしの一部を削除したり、原本のルビを省いたり、現代表記になおしたりした。

2 写真のうち第十二回のハリスのものと、第二十回の長沢鼎と幸助を撮影したものは、編者の手もとに同一物がなく、類似のもので代用した。